

予報文案

令和7年第1回一都三県サバ漁海況検討会

令和7年漁期サバたもすくい漁、棒受網漁の見込み

令和7年1月9・10日

静岡県水産・海洋技術研究所

1 予測

(1) 海況

【予測（2025年1～6月）】

黒潮大蛇行が継続し、A型基調で推移する。

蛇行北上部は概ね伊豆諸島海域の西側に位置し、伊豆諸島北部海域（大島～利島及びひょうたん瀬）、三宅島及び銭洲海域はいずれも概ね暖水に覆われる。沿岸水温はいずれの海域も「やや高め」～「極めて高め」で推移する。房総沖では、黒潮は接岸傾向で推移し、沿岸水温は「平年並」～「やや高め」で推移する。

1～2月の漁場水温は、伊豆諸島北部海域では、1月が18～21℃、2月が19～20℃で推移する。三宅島及び銭洲海域では、1月が20～21℃、2月が20℃前後で推移する。

【説明】

1月8日現在、黒潮は遠州灘沖をS字状に北上した後に東進し、銭洲海域や三宅島周辺を通過後、北東に向きを変え房総沖を流れている。水温は、伊豆諸島北部海域は20～21℃、三宅島周辺及び銭洲海域は21℃になっている。

黒潮は期間を通じてA型で推移し、蛇行最南下部から御前埼付近まで北上した後に東進し、三宅島周辺で向きを北東に変え、房総沖を流れる。また、御前埼はるか沖から北西へ向かい、大王埼周辺まで達した後に向きを東へ変え、三宅島周辺で向きを北東に変え房総沖を流れる時もある。いずれの場合も、これらの海域は黒潮からの暖水に覆われやすくなり、漁場水温は上昇する。房総沖では概ね接岸傾向で推移し、離岸は一時的である。また、黒潮からの暖水に覆われやすい。

なお、1月～2月の水温は水産研究・教育機構水産資源研究所の海況予測システム（FRA-ROMS II）等を参照した。

【海況予測の考え方】

黒潮流路については、12月の長期海況予報を参考にする。

2か月後までの黒潮流路及び水温は、FRA-ROMS II等を参考にする。ただし、現況を優先する。

大蛇行型の場合

- ・漁期中はA型流路（A型は継続期間が長い）
- ・伊豆諸島海域は、水温高めで推移

非大蛇行型の場合

- ・西の小蛇行の位置と規模を確認する。（都井岬に蛇行部があれば、2～3か月後に伊豆諸島海域に到達する）。
- ・4月以降は長期予報のとおり。
- ・N型流路の時、伊豆諸島北部海域は「低め」～「平年並」、三宅島付近は「平年並」～「高め」。野島沖の黒潮離岸距離は「平年並」。
- ・B型流路の時、伊豆諸島北部海域は「高め」～「極めて高め」、三宅島付近は「高め」～「極めて高め」。野島沖の黒潮離岸距離は「平年並」～「やや接岸」。
- ・C型流路の時、伊豆諸島北部海域は「低め」で暖水波及時に一時的に「高め」、三宅島付近は「低め」。野島沖の黒潮離岸距離は「平年並」～「著しく離岸」だが、伊豆諸島の東をS字に北上する場合には「接岸」。

（2）漁況

①マサバ

【予測（2025年1～6月）】

（ア）来遊量・漁獲量

低調であった前年を下回る。

（イ）漁期・漁場

初漁は2月下旬以降に伊豆諸島北部海域（大島千波・利島周辺）となり、漁期を通して主漁場となる。

(ウ) 魚体

27～30 cm主体の3歳魚が主体となり、4歳以上(31～35 cm)が混じる。※年齢は年初に加齢し2025年時で表す。魚体は尾叉長で表す。

【説明】

マサバ推定来遊資源量・漁獲量

2025年1～6月の伊豆諸島海域におけるマサバ来遊量及び漁獲量は、2024年を下回る見込みである。これは、水産研究・教育機構が公表するマサバ太平洋系群の資源量予測及び近年の海洋環境を踏まえて導き出した結果である。

まず、同機構によれば、当系群の資源量(暫定値)は2018年をピークに減少傾向を示している。伊豆諸島海域に来遊するのは成熟した親魚が中心となるが、卓越的な加入があった2013年級群以降は成長遅延(由上ら「令和3(2021)年度マサバ太平洋系群の資源評価」)が認められることから、成熟率を3歳魚で30%及び4歳以上で100%と仮定して親魚量を推定し、2025年1月時点の親魚量は235千トンと予測した。これは低調であった前年並である。

次に、海洋環境については、黒潮続流が北偏・沿岸寄りに流れる状態が2022年以降継続しており、2025年1月中旬もこの状況が続くと予測されている(2024年第4回東北海区海況予報)。加えて、2024年12月時点の東北海域における緯度経度5分ごとで集計した漁場水温の平均は20.2℃(前年:18.4℃、2019～2023年平均:16.1℃)と前年を上回る高温である。このことから、海洋環境は前年以上に悪化しており、親魚の南下は前年よりも困難であると判断されることから、来遊量は前年を下回ると考えられる。

このような状況下、2022年以降の黒潮続流の北偏によって親魚量に対する漁獲割合(漁獲量/親魚量)は極めて低い状態が続いており、漁獲努力量がほとんど変わっていないことを考慮すると、この低い漁獲割合は海洋環境の変化に伴う来遊量の減少を反映した結果である。特に2024年は最低値を記録した。2025年の漁獲割合を仮に過去5ヵ年(2020～2024年)の平均で試算すると、漁獲量は876トンとなり、2024年を上回る見込みである。一方で、過去最低値を記録した2024年の漁獲割合で試算した場合、漁獲量は356トンとなり、2024年並の水準になる。しかし、これらの試算は楽観的な予測に過ぎず、実際には来遊量が前年を下回ると考えられるとともに、漁獲努力量が前年同様であるため、漁獲量は前年を下回ると予測する。

※予測1:2025年の漁獲割合を過去5ヵ年平均とした場合の試算値

予測 2 : 2025 年の漁獲割合を過去最低値だった 2024 年の値とした場合の試算値

初漁日、漁場

2025 年の伊豆諸島海域におけるマサバ初漁日（漁期で初めてまとまった漁獲がある日）は、2 月下旬以降となり近年で最も遅くなる可能性がある。なお、漁場は北部海域（大島千波・利島周辺）に形成される見込みである。これは、2024 年 12 月時点における各地のマサバ水揚げ状況、東北海域の緯度経度 5 分ごとで集計した漁場水温の平均、FRA-ROMS II で示された海況をもとに推定した結果である。

2016～2022 年の初漁日は 1 月下旬～2 月上旬であったが、黒潮続流が北偏し東北海域の水温が上昇した 2023 年と 2024 年は南下が遅れ、いずれも 2 月中旬が初漁となった（表 2）。2025 年は、12 月時点の東北海域の水温が前年を上回る高温であることに加え、1 月中旬まで黒潮続流の北偏が継続する見通しであることから、回遊の遅れが一層顕著になると推定される。

マサバの南下については 2 つのグループに分けて考えた。1 つ目は、常磐北部で漁獲されている尾叉長 27～30cm 主体の魚群である。このうち明け 3 歳魚の一部が成熟に伴い南下すると考えられる。常磐北部は 2024 年 12 月時点で主漁場であり、銚子漁港では月間 3,000 トン程度が水揚げされているが、2023 年の同時期は犬吠埼沖が主漁場であったことから、2024 年は南下が遅れていることが伺える。2 つ目は、宮城県女川定置網で 12 月 23 日に 35 トンの水揚げが確認された南下群と思われる成魚の魚群（尾叉長 31～35cm 主体）である。これらの水揚げは例年よりも遅く、南下の遅れが明らかである。

また、例年 12 月から 1 月にマサバが水揚げされる千葉県外房海域（定置網・ハイカラ釣り・調査船）では、1 月 9 日時点でも南下群と考えられる魚体が確認されていない。このことも、南下が例年より遅れていることを示している。

なお、マサバの伊豆諸島海域への来遊は、大型の魚群が先行し、小型の魚群が遅れて来遊することが知られている。しかし、12 月時点の分布を見ると、小型の魚群（常磐北部）が大型の魚群（女川定置網）よりも南部に位置している。このため、2025 年は例外的に先に小型の魚群が漁獲され、その後大型の魚群が漁獲される可能性がある。

1～2 月の伊豆諸島海域では黒潮が沿岸寄りを流れ、2 月上旬までは北部海域でも 20℃を超える水温が予測されている。しかし、2 月中旬～下旬は北部海域に 18℃の等温線が近づくとみられ、マサバはこの付近へ集群すると考えられる。また、3 月以降も黒潮流路は A 型基調で推移し、水温はやや高め～極めて高めで推移すると予測されている（令和 6 年度第 2 回太平洋いわし類、マアジ、さば類長期漁海況予報会議）。このことから、比較

的水温が低い北部海域で漁場が形成され続ける可能性が高い。

魚体

伊豆諸島海域で漁獲されるマサバは、3歳魚（尾叉長 27～30cm）が主体となり、4歳以上（31～35cm）が混じると予測される。この予測は、12月時点の主漁場である常磐北部の魚群を主体とし、12月23日に女川定置網で水揚げされた南下群と思われる成魚の魚群が合流する可能性を考慮して導いたものである。

12月1日に常磐北部で操業された北部まき網の漁獲では、27～30cmの2歳魚（明け3歳魚）が主体であった。一方、12月23日の女川定置網で水揚げされたマサバは31～35cmが主体であり、銚子漁港で得られたマサバの年齢査定結果との比較から、3歳魚（明け4歳魚）が中心と推定される。なお、女川定置網で確認されたような南下群と思われる成魚の魚群は、現時点でほとんど確認されていないことから、主体は常磐北部の小型の魚群になると考えられる。

北上期

マサバが伊豆諸島海域から北上を開始する時期は、2024年と同様に3月下旬頃になると推測する。

マサバは20℃以上の暖水が波及すると北上を開始する傾向があり、今年も伊豆諸島海域で黒潮が沿岸に接近し、高水温が継続する見込みであるため、北上開始時期は前年と同様に通常より早まる可能性がある。

なお、伊豆諸島海域で産卵を終えたマサバは離散する一方で、熊野灘など伊豆諸島より西方の海域へ回遊した大型魚が、5月以降に再び伊豆諸島海域へ来遊する可能性がある。

【マサバ予測の考え方】

漁期当初のマサバ推定来遊資源量

昨年6月末時点のマサバ資源尾数から、7～12月の漁獲尾数及び自然死亡尾数を減じた尾数を年末時のマサバ資源尾数とする（水研機構データ）。これに、各年齢の平均体重を乗じた量を資源量とする。そのうち、4歳魚以上と3歳魚の一部を産卵親魚と考える。

漁獲量

漁獲割合（親魚量に対する漁獲量の比率）は、2000年代前半は0.05%以下で推移していた。2011年以降の漁獲割合は0.15～0.91%の間で推移しており、直近5か年（2020～2024年）の平均漁獲割合は0.37%である。

初漁日、漁場

- ・ 漁期初めの1～2月におけるマサバの集群は黒潮系暖水の影響下（16℃以上）の瀬にみられ漁場が形成される。【過去10か年（2015～2024年）の初漁時の漁場水温は16.0～19.6℃（平均18.6℃）】
- ・ 2012年までは、漁期初め（産卵期前、1、2月）の漁場は、ほとんどがひょうたん瀬～大室出しであった。【2013～2015年は北部海域が低水温となり、三宅島周辺海域で初漁がみられた。産卵盛期には、三宅島周辺海域に漁場が形成されることが多い。】
- ・ 親魚量が増加傾向にある2016年漁期には、初期漁場は三宅島周辺海域、盛漁期には銭洲海域にも形成された。過去の親魚量高水準期にも同様の傾向が見られた。
- ・ 漁期後半は、北部海域が主漁場となる。【ただし、北部海域が継続して冷水域に覆われると、三宅島周辺海域で漁場形成が継続する。】
- ・ 犬吠埼以北の水温が高いと南下しない場合がある。【2008年漁期は1、2月に常盤海域～鹿島灘に暖水が波及していたため、南下しなかった。】
- ・ 2019年以降の初期漁場は北部海域の利島もしくは大室出しで漁場形成されている。2017年からの黒潮大蛇行期以降、黒潮が銭洲～三宅島周辺海域を通過することが多くなり、漁期初めには、北部海域に適水温帯が形成されることが多くなった。

漁況

中熟期は水温が16℃を超える暖水が波及する瀬に、産卵盛期には18～20℃の暖水が波及する瀬に集群して、好漁となる。

魚体

漁獲物の体長組成から、大型個体が小型個体より先に来遊する。なお、熊野灘など伊豆諸島より西方の海域へ回遊した大型個体が、5月以降に再び伊豆諸島海域へ来遊する場合は

あり、漁期終盤には大型個体の割合が増える。

北上期

伊豆諸島海域の水温が 20℃以上に昇温するとマサバは北上を開始し、漁場が消滅する。通常 5、6 月の伊豆列島線上における黒潮流軸の水温は 22℃から 25℃に昇温するため漁場は消滅する。ただし、当海域が冷水渦に覆われる場合は漁場が継続することがある（例：2007 年漁期）。

【マサバ資源管理】

1990 年頃から低迷が続いていたマサバ太平洋系群の資源量は、2013 年級群の高い加入量により、資源量・親魚量ともに増加傾向が続いていたが、近年の不漁を踏まえ評価が見直された結果、資源量および親魚量は大幅に下方修正された。

2024 年度の資源評価（暫定値）によれば、2023 年の親魚量は 14.4 万トンと目標管理基準値案（62.6 万トン）を大きく下回り、漁獲圧も過剰と判断された。今後、安定的に親魚量を維持・増大させ、加入量の安定を図るには、未成魚の保護をはじめとする管理措置を継続的に実施することが重要である。

②ゴマサバ

【予測（2025 年 1～6 月）】

（ア）来遊量と漁獲量

前年並～下回る。

（イ）漁期・漁場

漁期を通して、伊豆諸島北部海域（大島千波・利島等）に漁場が形成される。

（ウ）魚体

32cm 以上の 3 歳（2022 年級群）以上が主体となる。

※年齢は年初に加齢し 2025 年 1 月時点で表す。魚体は尾叉長で表す。

【説明】

来遊量と漁獲量

2025年1～6月の棒受網 CPUE は2024年1～6月を上回ると考えられる。しかし、2023年からは棒受網操業が著しく減少しており、7～11月の来遊量を反映できていないと考えられる。また、2024年7～11月の棒受網・たもすくい漁の漁況経過が芳しくなかったため、前年並～下回ると考えられる。

漁期・漁場

2025年1月以降も黒潮大蛇行が継続することに加え、黒潮続流の顕著な北偏が継続していることから予測した。

魚体

2023、2024年は北部海域である大島千波や利島での操業がほとんどを占めている。かつて三宅島周辺海域で漁獲されていた個体よりも大きいため、直近2年の1～6月の漁獲物の尾叉長組成から判断した。また、年齢に関しては最近5年の Age-Length-Key の平均から判断した。